

氏 名 (本籍)	とん 童	れん 連 (中 国)
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)	
学 位 記 番 号	博 甲 第 6215 号	
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科	
学 位 論 文 題 目	Two cohort studies predicting preschooler's social competence development from maternal parenting behavior and attitude (母親の育児態度および行動が就学前児の社会能力発達に及ぼす影響に関するコホート研究)	
主 査	筑波大学教授	医学博士 須磨崎 亮
副 査	筑波大学講師	博士 (医学) 山 岸 良 匡
副 査	筑波大学講師	博士 (医学) 前 野 貴 美
副 査	筑波大学講師	博士 (医学) 奥 野 純 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本研究の目的は、乳幼児に対する母親の育児行動やその態度が、その後における児の社会的能力の発達にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることである。

(対象と方法)

日本のふたつのコホートを対象に、縦断的な観察研究を行った。

研究 1 では、0 歳から 4 歳までの 504 人とその保護者を対象に、2 年間にわたる追跡調査を行った。はじめに、質問紙法によって乳幼児の母親の育児状況を調査した。一方、こどもの発達評価シートを用いて専門の保育士が児の社会的能力を評価した。

研究 2 では、176 人の 9 か月児とその母親を対象に、9 か月間の観察研究を行った。18 か月時のこどもの共感能力の発達と母親の養育能力を評価するために、実験室でビデオ観察した。母親の養育態度について情報を得るために、質問紙法も併用した。

(結果)

研究 1 の結果は以下のとおりである。母親がこどもと歌を一緒に歌うことは、2 年後におけるこどもの社会的能力の発達に好ましい影響を与えていた。一方、母親がこどもと一緒にあまり遊ぶことができない場合は、こどもの社会的発達に負の影響を与えていた。発達段階の初期に母親がこどもに多くの本を読んであげると、2 年後には児のコミュニケーション能力が有意に発達していた。逆に、2 年の間に首尾一貫しない方針で母親がこどもを厳しくしつける事は、児の言語能力の発達に好ましくない影響を与えていた。

研究 2 の結果では、母親のこどもに対する養育能力、例えば母親がこどもに思いやりを持って反応してあげることは、こどもの共感能力の発達に有意に関連していた。母親がこどもに一定した生活リズムを保たせるように配慮したり、乳児期からこどもを褒めてあげたりすることは、18 か月時における共感能力の発達程度を予測する重要な因子であった。

(考察)

家庭における養育環境、とくに母親の育児行動や毎日の母子間の交流内容は、こどもの社会的能力の発達に強く影響した。一般的に社会環境と家庭における養育環境をあわせた保育の状況は、こどもの発達に影響する。とくに、母親が積極的にこどもと一緒に活動すれば、こどもが色々な社会状況に出会うことを促進することになり、そのために、こどもの社会的な能力が向上すると考えられた。さらに、母親が長期間にわたって首尾一貫した育児態度を保つことは、このような効果を強めることになるのであろう。母親が日々、こどもと一緒に行動する中で、濃密な感情的な交流を深めることは、こどもの共感能力の発達を促進するのであろう。

結論として、童氏の研究は、「母親が児と一緒に毎日の活動に積極的に加わり、体罰を避けることを心がけるべきである」ことを明らかにした。長期間にわたり、積極的で首尾一貫した養育態度を保つ事が重要である。母子関係では、単に一緒に行動するというのみならず、感情的な交流を深める必要がある。乳児期といえども、母親の積極的な児へのかかわりは、その後のこどもの共感能力の発達に有用であることを明らかにした。

審 査 の 結 果 の 要 旨

童氏は、日本人乳幼児を対象にした追跡研究により、こどもの社会性や共感能力の発達に母親の育児態度が大きな影響を与えていることを実証した。今日、日本を含めて、全世界的に女性の社会的進出が進み、女性が責任ある仕事を受け持つ機会が増えている。このような状況の中で、こどもの健全な発達をはぐくみ、理想的な母児関係を保てるように、どのように環境を整備するかは、国や社会制度の違いを超えて大きな課題になっている。

本研究では、父親・パートナー・祖父母など母親以外の家族メンバーや保育園など集団保育の役割について、評価が少ない。また、日本人と中国人との国民性・社会性の違いについても今後の研究の進展が待たれる。しかし、童氏の研究により、乳幼児期の母児関係の重要性が改めて実証されたことは高く評価される。

平成 23 年 12 月 27 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。